

期待される医療
2010

— 早めの相談がポイント —

痔の治療

特集

痛みや腫れ、出血など、長年「痔」に悩まされている方は意外に多いもの。一般的に「痔」と呼ばれる病気の大半は痔核（いぼ痔）で良

性の疾患ですが、がんなどの悪性疾患が隠れている場合もあります。おしりに違和感を覚えたら、早めの受診を心がけましょう。



松島病院 院長
松島 誠

日本大腸肛門病学会評議員、日本大腸肛門病学会認定専門医指導医、日本外科学会認定医、日本消化器外科学会指導医、横浜市立大学医学部非常勤講師。昭和53年3月、北里大学医学部卒業。

「痔」とは

「痔」とは、医学的には肛門周辺の疾患すべてをさし、これらを診断・治療の対象とするのが肛門科です。ただ、一般的には「痔」というと、痔核（いぼ痔）、痔ろう（あな痔）、裂肛（きれ痔）の3種類を指し、このうちのおよそ60%が痔核です。痔核は、肛門周辺の血管の腸壁と皮膚のつなぎ目（歯状線）より内側にできたものを内痔核、外側にできたものとその表面を被う皮膚、粘膜のゆるみを外痔核といいます。良性で、がん化することはありませんが、排便の際に出血したり、肛門から飛び出したりします。痔ろうは、細菌感染などで肛門周辺に膿がたまる病気です。裂肛は、便秘などによって硬くなった便が肛門の皮膚を傷つけることによって起こります。

「痔」の治療法

痔核の治療法としては、軽度なら、便通をスムーズにする生活指導や、痛みや腫れ、出血等を抑える薬物療法などで症状の改善を行います。しかし、脱出した痔核が手を使わないと戻らないまでに大きくなった場合は、さらに進んだ治療法が必要です。痔核の根治療法としては、従来、手術で飛び出した痔核を切除してしまう結紮切除術が

行われてきました。再発もほとんどなく、多くの患者さんが「もっと早く手術を受ければよかった」と言われます。しかし、1週間程度の入院が必要なことなどから、躊躇する患者さんも多いようです。そこで、最近、より手軽な治療法として普及してきたのが、薬剤を患部に注射し、痔核の脱出を改善する硬化療法です。5年前に認可されたこの療法は、現在のところ際立った副作用もなく、2日〜4日間程度の短期の入院ですみ、再発率も17%程度とされています。ただ、すべての患者さんに適用できるわけではありません。

痔ろうは進行性で、肛門機能に支障が出たり、がん化の恐れもありますから、早めに手術で治してしまう必要があります。裂肛は、スムーズな排便習慣が再発防止の決め手となります。

受診の目安

「痔」自体は命に関わる病気ではありませんが、まず、排便時に出血するのは、医学的には異常な事態であると考えてください。痔だと思っていれば、がんだったということも少なからずあります。早めに的確な診断を受け、痔か、それ以外の病気なのか、また、痔なら、自分はどんな状態で、どんな治療法があるかを知ることが重要です。痔の治療の成否については、1つには経験豊富なことが鍵になります。受診の際は、専門医がいるか、肛門科を専門に標榜する病院やクリニックを選ばれたほうが安心でしょう。そして、医師と十分に話し合い、納得したうえで治療を開始されるとよいと思います。